

茨城女子短期大学

「3つのポリシー（学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針）」に関する点検・評価の概要

本自己点検・評価は、学内の各学科における自己点検・評価の結果に加え、学外の客観的な視点を取り入れるため、県内の高等学校および中等教育学校の教員20名（進路指導担当9名、第3学年担当11名）を対象として実施したアンケート調査（2026年5月12日実施）の結果に基づき行ったものである。

1. ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針：DP）の視点から

■ ディプロマ・ポリシー（DP）定義

学生が卒業までに修得すべき能力や、人材養成における到達目標（ゴール）を定めた方針。

【主な評価と実績】

- **DPに沿った人材養成への高い支持：**「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に沿った人材養成を行っていると思うか」という設問に対し、すべての回答者が肯定的な評価（「とてもそう思う」2名、「そう思う」17名、計19名。「あまり思わない」「まったく思わない」は0名）を示した。これは、本学の教育が出口管理（学位授与基準）において、学外から極めて高い信頼を得ていることを示している。
- **「専門的な知識・技術」と「豊かな人間性」の結実：**具体的な人材養成の成果として、「保育士の養成」が19名、「幼稚園教諭の養成」が13名と、極めて高い評価を得ている。これは、こども学科のDPに掲げられている「社会に貢献するための専門的な知識と技術を修得していること」および「子どもの育ちを支援できる豊かな人間性と協和の心を身につけていること」が、実践的な成果として高校教員に強く認識されているためと考えられる。また、「社会や地域に貢献できる人材の養成（就職指導を含む）」（8名）も選択されており、地域貢献を企図するDPの方向性が支持されている。
- **高い就職率への確かな評価：**卒業生の就職率について、回答者のうち16名が「95%以上」であるとの確に認識しており、DPに定める「自立した人間として社会生活を勤勉に営む能力」の育成が、確実な就職実績へと結びついていると評価されている。

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針：CP）の視点から

■ カリキュラム・ポリシー（CP）定義

DPを達成するために、どのような教育課程を編成し、実施するかを定めた方針。

【主な評価と実績】

- **CPの編成方針に対する肯定的な評価：**「カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程を編成していると思うか」という設問に対し、回答者19名全員が肯定的に回答した（「とてもそう思う」4名、「そう思う」15名）。
- **専門性と実務・資格取得を重視した教育内容：**教育内容の充実度（複数選択）においては、「専門的な知識や技術を学べるカリキュラム」（13名）、「さまざまな資格を取得できるカリキュラム」（12名）、「キャリア形成や就職に役立つカリキュラム」（10名）が上位を占めた。これは、表現文化学科のCPにおける「資格課程を置き、実務能力を養成する」「専門教育課程を置き多角的かつ体系的に学ぶ」、およびこども学科のCPにおける「実践を重視した教育課程」「保育の専門的知識、技術を修得する」という方針が、実際の教育内容と整合し、有効に機能していることを示している。
- **少人数教育と地域・社会との交流を重視した教育方法：**教育方法の評価では、「少人数教育やグループ学修を取り入れた教育」（14名）、「社会や地域との交流を取り入れた教育」（12名）に高い評価が集まった。これらは、表現能力を磨き「自立した学習者」を育成するための表現文化学科のCPや、社会ニーズに対応するこども学科のCPを推進する上で、効果的なアプローチであると外部（学外）から高く評価されている。

【今後の課題】

- **ICT環境の整備と教育手法の強化：**一方で、「ICT機器等を活用した教育」の充実を選択したのは2名にとどまり、学校環境としての「ICT環境が充実している」を選択したのも2名のみであった。教育手法および学習環境におけるICTの活用強化・環境整備は、今後のカリキュラム・ポリシーを実践する上での重要な改善課題と言える。

3. アドミッション・ポリシー(入学者受入れの方針:AP)の視点から

■ アドミッション・ポリシー（AP）定義

本学が求める学生像や、それを評価するための入学者選抜の方針を定めたもの。

【主な評価と実績】

- **APに基づく選抜への確かな信頼：**「入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）に沿った入学者選抜を実施していると思うか」について、回答者の全員（19名）が肯定的に評価している（「とてもそう思う」6名、「そう思う」13名）。
- **多面的・総合的選抜の適切な運用：**入学者選抜制度の具体的な評価において、「多様な制度を用意し、多面的・総合的に入学者選抜を実施している」という設問に対し、「とてもそう思う」が9名、「そう思う」が10名と、極めて高い評価を得た。これは、日本語・文化に関心を持つ人材（表現文化学科AP）や、コミュニケーション能力および協調性を備えた人材（両学科AP）を多角的に見極める選抜が適切に機能していることを裏付ける結果と考えられる。
- **高大接続と「学力の3要素」の評価：**各入試における「学力の3要素」の評価についても、18名が肯定的（「とてもそう思う」2名、「そう思う」16名）に回答した。ただし、1名が「あまり思わない」と回答しており、高校側からは、基礎学力や主体性・協働する態度な

どを適切に評価する基準のさらなる精緻化（ブラッシュアップ）や、より丁寧な説明・周知が期待されている可能性がある。

- **選抜の公正さと選考基準の透明性：**「選考基準の明確さ」（19名）や「公正かつ適正な実施」（19名）、さらには学校推薦型選抜（指定校・公募制）における「評価基準の適切さ」（指定校19名・公募18名）においても、高い肯定評価が得られた。高校側との間に、APに即した公正な選抜プロセスに対する信頼関係が構築されていることが窺える。

4. 総括

本アンケート結果は、茨城女子短期大学の「3つのポリシー」のすべてにおいて、学外（高校の教員）から非常に高い水準で支持・信頼されていることを示している。

自由記述や今後の変化に関する意見では、「本学の教員の手厚い個別指導（面倒見の良さ）が高校側に十分に伝わっていない」という広報・周知上の課題が指摘された。また、「地域社会・自治体との連携強化（11名）」や「中・高等学校とのさらなる連携（7名）」の必要性が挙げられた。さらに、近年の大学共学化の流れを踏まえつつも、「女子学生だけで落ち着いて学業に専念でき、経済的に困難な状況にある生徒でも2年間で自己実現（夢の達成）を果たせる独自の学習環境を今後も維持してほしい」という切実な期待も寄せられている。

これらの有益な意見を反映し、今後は「地域社会および高校との双方向の連携強化」を通じて、ポリシーに掲げる「地域社会への貢献」や「協和・協調」の精神を一層深化させるとともに、本学独自の強み（きめ細かな少人数指導や、安心して学べる学習環境など）を学外へより戦略的に発信していくことが求められる。